

「趣味」と「リフレッシュ」

私の趣味は映画鑑賞です。映画は、二時間前後という驚くべきコンパクトさで、私を別世界に連れて行ってくれます。映画の魅力は言い尽くせませんが、セリフ・音楽・演技・衣装・カメラワークなど、様々な工夫がはりめぐらされ、演出技術の総結集を味わえるところが特に気に入っています。膨大なスタッフの名前がぞろぞろと流れていくエンドロールをうっとり眺めながら、ストーリーや名シーンを振り返り、感動をそのままにレビュー記事をアップする。私の至福の時間です。

とここで、このコーナーのタイトルは「このころのリフレッシュ」と言います。「リフレッシュ」という言葉には、疲れた身体でザバーッとシャワーを浴びたときのような、あるいは暑い路地から冷房のきいた建物に入ったときのような、今までいたところから方向性がパッと変わるイメージがあります。

となると、ここでは心理臨床にあって学びが多く、人の心について考えさせられるような映画を挙げるのはちよつと違う気がします（そういう映画に興味がある方は、本誌前号の特集「心理臨床のフィクションとリアル」をお読みください）。です

マオメティカルクリニック 柴田彩花

ので、私の思う映画の「リフレッシュ部門」、ゾンビ映画について紹介しようと思います。

ナイト・オブ・ザ・リビングデッド ドから見るゾンビの特徴

ゾンビ映画といえば、おどろおどろしいゾンビたち、人々の阿鼻叫喚……。「リフレッシュ」という爽やかな語感とは、一見するとミスマッチです。なぜ、ゾンビ映画でリフレッシュができるのでしょうか。ゾンビ映画の元祖にして定番、ジョージ・A・ロメロ監督の『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』を観ながら説明していきましょう。



『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』

ゾンビ映画の中では基本的に、ゾンビはすでに「いる」ものなのです。緻密なSF設定もあつとおどろく伏線回収も必要ありません。ご当地ゾンビアイドルアニメ『ゾンビランドサガ』のセリフを借りれば、「なんやかんやで墓からドーン！」で彼らは出現します。「化学物質だ、ウイルスだ、突然変異だ……」。劇中のラジオではそんな憶測も飛び交いますが、ゾンビを目の前にしたらもはや「なぜ？」は無益です。倒す・逃げる・生き延びる。人間に出来ることはただそれだけになります。

場面が進み、一軒家に逃げ込み仲間と籠城するバーバラたちのもとに、ぞくぞくとゾンビが集まってきました。彼らをよく見てみましょう。人を見つけて喜ぶ様子も、怪我をして痛がる様子も見せません。唯一の弱点である頭部を壊すまで、淡々と人間に襲いかかってきます。ポイントその②は、このようなゾンビの極端な単純構造です。彼らには物音や光に刺激されて襲いかかる「機能」だけがあり、「心」がまったく無いようです。それゆえに、見慣れてくれ

ば、ゾンビへの恐怖心はなくなりま
す。もちろん、危険なものとして危
機意識は抱きますが、何を考えてい
るかわからない不気味さはありません。
ホラー映画との大きな違いがこ
こにあります。またその無反応さに
よって、生きるものを傷つけてしま
ったことに伴うこちらの痛みも生じ
にくくなります。そうして、ゾンビ
映画を「痛快」「アクション」として楽
しめるのです。

ストーリーも佳境に入ってきましたし
た。パニックに陥った人間たちは、
事故や仲間割れを起こして一人また
一人と命を落としてしまいます。ゾ
ンビに囲まれた状況では、無茶をし
たり自分勝手に振る舞ったり、泣き
叫ぶばかりで何もしなかったりとい
った人間の弱さが命取りです。「も
う、今はそんなこと言ってる場合じ
やないでしょう！」「火を使うなら
もつと……！」と、画面のこちらか
ら声をあげたくなります。それでも
主人公たちが生きた人間だからこそ、
そんな不器用さも見られるのでしょ
う。ポイントその③、ゾンビのいる
世界では、利己的な行動も非力さも、

あらゆる「人間らしさ」を愛おしく
見ることができるとは、

そろそろクライマックス。ついに
バリエードの内側からもゾンビが現
れてしまいました。「感染」という
やっかいな性質によって、安全地帯
があつという間に戦場に早変わりす
るところもゾンビ映画の見どころの
ひとつです。さらになんと、この新
しいゾンビは突然道具を使つて的確
に攻撃してきました。今までのゾン
ビはもつと鈍くて、ぶかっこうだつ
たのに……。もうわけがわかりませ
ん。「だつてそのほうが雰囲気出る
でしょう」。ロメロ監督の声が聞こ
えてきそうです。

悪魔・怪物といったホラーコンテ
ンツが「悪」や「恨み」のイメージ
を担っているのに対して、ゾンビが
体現するのは「無」です。「Living-
Dead (生きる死体)」の名が表すと
おり、生から死への時の流れは止ま
り、生体はねじれを伴います。永遠
に肉を求め続けても飢餓で死ぬこと
はなく、あんなにたくさん食べても
「ゾンビの糞」あるいは「排泄シー
ン」なるものは存在しません(私の

見る限りでは)。そんな不自然なゾ
ンビと対峙すればこそ、生き延びる
人間の自然な、ありのままの生がみ
ずみずしく映るのです。画面をオフ
にし、大きく深呼吸をしましょう。
ああ、この世に生きていてるってすば
らしい。これぞ、リフレッシュでは
ありませんか。

ゾンビ映画バリエーションズ

ゾンビ映画はいまやひとつのジャ
ンルとして人気を博し、多くのゾン
ビ映画が続きました。ゾンビ自体は、
ロメロ監督が「人を襲い、頭以外は
不死身で、感染により増殖する」と
いう基本原則を打ち出した以外に定
義を持たないので、描きたいストー
リーに合わせ

て設定のアレ
ンジが可能で
す。たとえば
ダニー・ポイ
ル監督『28日
後……』では、
潜伏期間のな
いゾンビウイ
ルスにより人

がその場でゾンビ化するためパニッ
ク感が強く、邦画ゾンビで最も有名
な『アイムアヒーロー』では「生
前の習慣を反復する」という設定を
付与したことで絶妙なウェット感が
演出されています。最近では、こう
いった映画ごとの独自設定も楽し
みのひとつです。

さて、普段頭を空っぽにして見て
いるゾンビ映画について一生懸命文
章をまとめたおかげで、すっかり疲
れ切つてしまいました。書き終えた
ら、最近お気に入りのドラマシリー
ズ『ウォーキング・デッド』の続き
でも見ることにします。



「アイムアヒーロー」
©2016映画「アイムアヒーロー」製作委員会
©2009 花沢健吾/小学館
発売元: 東宝 販売元: エイベックス・ピクチャーズ